

# 戦国期における丹波の豪族・赤井氏の盛衰

——荻野直正を中心にして——

## 大 槻 準

### はじめに

王城の地・京都に隣接する丹波には長く統一権力が生まれにくかったが、戦国時代に入ると土豪がその動きをみせはじめ最終的には多紀郡の波多野氏と氷上郡の赤井氏の二氏が勢力を張った。しかしこの両氏も織田信長の命を受けた明智光秀によって滅ばされてしまう。このような戦国期の丹波をめぐっては守護と土豪の關係を取り扱った今谷明氏の研究<sup>(1)</sup>があり、中央に積極的に関わりつつ勢力を拡大した波多野氏については芦田岩男氏・細見末雄氏・森田恭二氏らの研究<sup>(2)</sup>があつて、その全体像はほぼ明らかになっている。ところが赤井氏については、青木俊夫氏・船越昌氏・細見末雄氏らのみるべき研究<sup>(3)</sup>はあるものの、赤井氏が在地領主の道をたどったこともあつて波多野氏の研究に比べると不十分な点が多い。そこ

で本稿では、赤井氏の丹波における活動を、赤井氏を飛躍的に発展させた一族の荻野直正を中心に論じてみたい。荻野直正は反信長行動を起こした張本人であり、それゆえその在地支配や人的な統率をみることで戦国の土豪赤井氏の本領をみる事ができると思うからである。

### 一、赤井氏の登場

諸系図<sup>(4)</sup>にみえる赤井氏の出自は、どれも共通して清和源氏頼季にはじまり、頼季の孫家満(家光)に至って信濃国から丹波国に流され芦田(井上)を名乗つたとある。また『寛政重修諸家譜』には、朝家の子為家が丹波国氷上郡の新郷に住し初めて赤井を称したとし、その為家の子重家が別れて荻野氏の祖になったとしている。このように系図では、赤井氏は芦田氏や荻野氏と同族であるとされている。ところが

芦田や荻野の名は鎌倉期の文書に見られるのに、赤井のそれは戦国期にならないと現れない。しかし戦国期以降にみられる赤井氏の文書の中で、芦田姓を用いているものが見られ、当時から赤井氏が本姓を芦田にしていたことは事実である。芦田氏と荻野氏のいずれもが、丹波国において鎌倉期以来の在地領主であったゆえ赤井氏が勢力を拡大する中で丹波でも名の通った一族の姓を奪っていったものと思う。なお船越昌氏は、赤井氏はもともと葉の製造とその販売の特権を掌握していた一族であったと述べておられる。『寛政重修諸家譜』の中にも、赤井氏当主が重病の旅人に葉を与えたという話を載せているが、いつの頃からか新郷を本拠にした赤井という一族が現れたというのが実情であろう。

赤井氏が史料に初めて名を出すのは、永正十七年三月で、『守光公記』の同月十二日の条に、赤井兵衛大夫が禁裏御料の栗作郷を違乱、押領したとあり、この頃赤井氏が在地の土豪として所領の拡大を図っていたことがわかる。この赤井兵衛大夫とは系図から伊賀守五郎忠家とわかり、荻野直正の祖父にあたる。忠家は太永六年、管領細川高国が被官であった香西元盛を謀殺したために始まった合戦に参加している。元盛の兄の波多野植通（元清）は末弟の柳本賢治と共に高国に叛旗を翻し、植通は居城の八上城に、賢治は神尾寺城でそれぞれ挙兵した。それに対し高国は討伐軍を派遣し神尾寺城を

包囲した。そのとき赤井忠家は二千人の兵を率いて賢治方として参戦し包囲軍を敗走させたのである。赤井氏がかんりの軍勢を動員できる力を持っていたことがわかる。神尾寺城の包囲軍が敗れたため、高国が派遣していた八上城の攻囲軍も敗走した。管領に対して堂々と刃向うこのような丹波勢の行動の背景には、阿波国にいた反高国派の細川晴元との連携があった。波多野氏はこの抗争をいち早く利用して勢力の拡大を図ったが、赤井氏も波多野氏に協力することで勢力の拡大を図ろうとしたと思われる。勢いに乗った丹波勢は、翌大永七年二月に細川晴元の先鋒として堺から上陸していた阿波勢と合流し、高国軍を撃破し京都を制圧した。赤井忠家もこの高国軍との戦闘に参加しているゆえ柳本らと共に入京していたと思われる。三月には晴元が將軍足利義晴の弟義維を擁して堺に上陸し、波多野植通は子の秀忠らとこれを迎えている。その後、近江に逃れていた高国が再び京都に迫り晴元軍と戦っている。両者は、いったんは和睦するがその後は各地で戦闘が続けられる。その和睦後の戦闘に忠家が参戦し敗れていることが「敎助大僧正記」の大永八年正月条にみえる。またこの戦闘のあった日に柳本氏と波多野氏が丹波に帰ったと『実隆公記』にあることから、赤井忠家も帰国したのと思われる。高国はいったん京都を回復したが再び京都を追われ柳本賢治が入京している。高国派と晴元派の争いは大永八

年の七月頃に激化する。

赤井氏も丹波にあつて高国方の土豪を攻めていることが『塩見家文書』の八月二十九日付「細川高国書状」でわかる。塩見氏は丹波国天田郡の土豪であるので、おそらく赤井氏は天田郡に兵を進めていたのである。赤井氏はさらに播磨国に波多野氏や柳本氏と共に攻め入っている。それは『荻野文書』にある九月十七日付「細川高国感状写」からわかるが、また同じ『荻野文書』の九月四日付「堯成書状写」から但馬国朝来郡に出陣したこともわかる。これら一連の文書はいずれも年季不詳ではあるが、赤井氏が晴元派として活動していたことを示している。その後柳本賢治は晴元派の中心的な役割を果たし各地を転戦している。その間に波多野植通は死去（享禄三年六月八日）し秀忠が跡を継いでいる。そして同月三十日には賢治も播磨攻撃中に暗殺され、翌年六月には細川高国が天王寺で敗れ、いったん尼崎へ逃げたが大物の広徳寺で自害している。しかしこの後も両派の争いが終わつたわけではなく、高国派は細川尹賢の子氏綱を跡目に立てて抵抗を続けた。『久下文書』の「久下氏由緒書」に、赤井氏が享禄四年六月に摂津国に出陣していたことや享禄六年に在京していたことなどが書かれてあり、赤井氏も戦闘を続けていたことがわかる。丹波でも両派に分かれた争いは続いていたが、守護代内藤氏や波多野氏などは形勢の有利な方に何度も

鞍替えをしている。天文二年細川高国の弟晴国を奉じて挙兵した波多野氏は、晴元方の赤井氏がいる氷上郡に兵を進め稲継城を攻めた。この城は赤井氏のものであったが、晴元の家臣である赤沢藏人景盛が派遣されて城将として波多野軍を退けた。それは六月五日付「御内書引付」からわかるが、この時に城の所有者である赤井忠家は戦闘に加わっていて戦死したらしい。『寛政重修諸家譜』によると忠家が死んだのは享禄二年七月十六日となっているが、氷上郡氷上町谷村にある忠家墓碑と、同じく氷上町新郷にある曹洞宗鷲住寺の過去帳や位牌は天文二年五月二十四日となっている、この戦闘で忠家が死んだことを推測させる。一度は退却した波多野氏であったが『言継卿記』十月二十二日条によると、再び稲継城を攻撃して十月二十一日に落城させたことがわかる。そのとき晴元方の赤沢兄弟が討死し内藤氏も没落したと記し「一国平均」になったという。丹波では波多野氏に対抗する勢力がなくなつたのである。赤井氏の諸系図にも忠家の子時家が三木城の別所氏を頼つて播磨国に落ちていったとあり、そのことを証明している。

## 二、赤井氏の勢力拡大過程

天文五年に細川晴国が自刃し波多野氏が再び晴元方となる

と、赤井時家父子は丹波に帰還し所領を回復していったようである。『宝鏡寺文書』の天文五年と思われる閏十月二十三日付「蘆田時家書状」から、時家が氷上郡の多利村を違乱していたことがわかる。『久下文書』の天文六年三月二十一日付「室町幕府奉行奉行人奉書」に、芦田兵衛大夫の与力が久下重像の知行する小椋莊を押領したとある。この芦田氏とは兵衛大夫とあることから、時家の子家清のことであろうと思われる。その間、波多野氏は天文七年には守護代の内藤国貞を追放し、晴元方として丹波での地域権力を掌握した。この波多野氏と赤井氏の関係を示す史料が、年季不詳ではあるが『波多野文書』の十月十日付「細川晴元軍勢催促状」である。それをみると、波多野秀忠が敵方に対抗するために丹波のほかには但馬の軍勢まで動員している。敵方とは細川氏綱方のことであり、秀忠は丹波・但馬の細川晴元方の国人衆を統括する役割を果たしていたのである。秀忠が丹波奥郡にまで影響力を行使していることから、氷上郡の時家もそれに協力していたのであろう。一時は波多野氏によって丹波を追われた赤井氏であったが、忠家以来の同氏との友好関係は持ち続けているのである。秀忠は天文九年に娘を三好長慶に嫁がせているが、長慶が細川晴元から離反し秀忠の娘を離縁すると三好氏と反目するようになる。天文二十一年四月、長慶は波多野氏の居城・八上城への攻撃を開始する。その時、波多野氏の当

主は晴通（元秀）で、史料からみて植通の子で秀忠の兄弟と思われる。このとき赤井氏は三好氏に敵対していた波多野氏と同盟を結んだ。晴通の娘が時家の嫡男家清に嫁いでいたこと（『寛永諸家系図伝』）からそれがわかる。一方、時家の次男才丸は丹波国氷上郡の黒井城主・荻野伊予守秋清の弟の養子となり、荻野直正と名乗っていた。『荻野文書』に八月五日付「赤井時家書状」が残っている。この書状は年季不詳で宛名も欠いてあるが、同じく『荻野文書』にこの文書の写しと思われる書状があり、それによると宛名に荻野氏三名が書かれてある。この三名は同じ『荻野文書』の「朝日村住人荻野氏交名注進状」に見られる十八人の武士の中にいるが、朝日村は丹波国船木荘にあり、直正はこの「朝日十八人衆」とよばれた荻野一族の頭領となっていた。<sup>5)</sup>その後直正は伯父の秋清を殺して黒井城主となり、悪右衛門と自称する。

天文二十二年九月十九日、三好方として復権し八上城攻めに加わっていた内藤国貞が討死し、国貞の女婿松永長頼（甚助）が内藤氏の居城・八木城へ入った。内藤氏は松永久秀の弟であるこの長頼が跡目を継ぎ、内藤宗勝を名乗って守護代になった。宗勝は八上城への攻勢を強め、波多野晴通は抗しきれず天文二十四年に開城した。その後宗勝は八上城に甥の松永孫六を配し、波多野氏の一族を配下にして多紀郡を支配する。弘治元年、赤井家清は弟の荻野直正らを率いて三好方

の芦田氏と足立氏の連合軍と香良において戦い勝利したと諸系図にある。この「香良合戦」は激戦であったようで、芦田・足立方は一族三十六人すべて討ち取られ直正も負傷したという。現在、水上郡青垣町栗栖野の祖父祖父堂に祀られる三十六人は芦田・足立方の死者と一致するので、この時の死者であろう。諸系図によると、赤井方も家清が深手を負いその傷がもとで弘治三年二月に三十三歳で死去し、家清の嫡子忠家（五郎・市郎兵衛）は幼少のため叔父の直正が後見人となった。『寛政重修諸家譜』によると忠家の生母すなわち家清夫人は波多野晴通の娘であった。直正はその未亡人を娶って波多野氏との同盟関係を維持している。その頃波多野晴通は居城の八上城を追われているが、あるいは直正を頼っていたのかもしれない。この「香良合戦」の勝利によって水上郡を掌握した赤井氏は、さらに郡外にも勢力を伸ばし奥丹波では筆頭の地位を占めるようになる。『波多野文書』に「赤井時家・荻野直正父子連署書状」がある。連署している父時家は家清死後も存命し、しばらくは子の直正の補佐をしていたと思われるが、諸系図によると天正九年五月八日に八十八歳で死んだとある。一方、口丹波では本拠の船井郡に加え多紀郡をも支配していた内藤宗勝が隆盛を誇っていた。永禄八年八月二日、天田郡を巡って赤井氏は内藤氏と戦い、直正は守護代の宗勝を斬った。八月五日付「大覚寺門跡義俊副状」の中

にこのことに関する記述が見られ、丹波は直正が平定したと書いてある。直正が宗勝を討った後、これまで内藤氏の下に押えられていた波多野氏を始めとする丹波の諸豪族が一斉に蜂起した。『多聞院日記』の同年八月二十八日条によると、波多野・須知・柳本氏が赤井方へ寝返って丹波一円が三好・松永勢の敵になり山城国の長坂口に打って出てきたとある。この翌年に波多野晴通は八上城を攻め居城を回復している。また『言継卿記』の同月二十七日条によると、赤井氏が丹波で自立した柳本や波多野氏と共に山城国の西岡に出兵し、西岡衆と合戦をしていることがわかる。松永久秀方となっていたのは、永禄八年十一月頃から久秀が三好三人衆と敵対したので味方したのであろう。これらの記録から、依然として赤井氏と波多野氏の協力関係が続いていることもわかる。また赤井氏が天田郡を制したことが、年季不詳ではあるが『夜久文書』の九月九日付「赤井忠家安堵状写」からわかる。夜久氏は但馬国朝来郡の豪族であり、この文書は赤井氏が但馬国にまで進出していたことも示している。このように織田信長入洛の頃までに、丹波国においては奥丹波を赤井氏が、口丹波を再び波多野氏がそれぞれ支配していたものと思われる。

### 三、反織田信長派の赤井氏

永禄十一年九月二十六日、織田信長は足利義昭を奉じて入京した。この年の九月から十月にかけての信長の畿内平定戦で、『多聞院日記』の十月六日条は丹波も信長方になったとしている。このような中で赤井氏も信長方となったのである。『赤井文書』に永禄十二年のものと思われる閏五月七日付の「細川昭元書状」がある。昭元とは細川晴元の子六郎のことで、信長の畿内平定戦により三好三人衆と共に芥川城を追われ、丹波国人の盟主的存在となっていた荻野直正に協力を求めているのである。つまりこの時点で赤井氏はまだ信長に服属していなかったことがわかる。ところが同年九月、信長が三好三人衆を再び芥川城に攻めた際、丹波国三郡の国衆が信長に参じたとして『永禄以来年代記』にある。このとき赤井氏や波多野氏もおそらく信長方として参戦したのではないかと思う。赤井氏が信長に服属していたことは、『言継卿記』の中にある「大典侍女房奉書」からわかる。この女房奉書は皇室領の丹波国新屋荘を押領していた赤井氏に、信長から年貢納入のことを伝えるよう、正親町天皇が山科言継に命じられたというものである。日付が十一月五日であるから、少し前から赤井氏は信長に服属していたのであろう。言継は同月

十三日に岐阜で信長にこのことを申し入れた。一方、信長は翌年三月に赤井忠家に奥三郡の知行を認めている。実質的には丹波三郡は荻野直正が手に入れたものだが安堵状は忠家に出されており、直正が後見人として惣領家の忠家を立てていたことがわかる。このように信長に丹波奥三郡を安堵された赤井氏であったが、実際には但馬や丹後へも進出していたため、必ずしも満足の行く内容ではなかったであろう。その後『言継卿記』には新屋荘からの年貢納入を伝える記事はなく、赤井氏はこの頃から、信長に反抗する兆しがあったように思う。それを察していたのか、永禄十三年になって三好三人衆らと反攻作戦を開始したときのものと思われる細川六郎の書状が荻野直正に届いている。それが『赤井文書』にある三月二十日付「細川昭元書状」で前のものと同様に直正に協力を求めたものである。しかし今のべたように三月には赤井氏は信長からの安堵状を得ており、六郎に協力することはなかった。赤井氏と同様に波多野氏も信長に従っていたため、信長入洛当初は丹波の国人の多くが信長方になっていたと思われる。

そのような中、元龜二年十一月に但馬国守護の山名祐豊が丹波国に侵入し、赤井氏の山垣城を襲撃、奪取した。赤井忠家と荻野直正は、直ちに救援に向かい奪回したが赤井勢はその勢いで但馬へ進入し、朝来郡の竹田城に入城している。こ

の赤井氏と山名氏の争いは生野銀山を巡ってのものであった。直正の甥であった竹田城主・太田垣朝廷が山名氏と争っており、幼少の朝廷を後見していた直正がその争いに介入したというわけである。しかし山名祐豊は織田方であったため、赤井氏の行動は信長の信頼を損ねる行為であった。だが信長は祐豊の救援要請にも各地に転戦中でも但馬や丹波へ兵力を動員できなかった。その間、直正は知行地の安堵に不満があつて信長に不信感を持っていたからか、足利義昭を始めとする反信長勢力との連絡を密にしていくなつた。『赤井文書』に八月二十二日付「足利義昭御内書」があり、そのことがわかる。さらに天正元年のものとされる正月二十七日付「顕如上人御書札案留」から、直正が越前の朝倉義景に自分の「京都進行計画」を提示していたことがわかる。しかし義景からそのことを聞いた顕如はその計画を一蹴している。また直正は甲斐の武田氏とも通じていた。そのことは『赤井文書』の二月六日付「武田勝頼書状」からわかるが、その中で勝頼は雪解けを待つて美濃へ出兵すると述べている。この書状は年季不詳であるが、天正二年二月に勝頼が書面通り美濃に進攻していることから、この年のものだとわかる。勝頼は美濃を席捲したが越後の上杉謙信に背後を脅かされて軍を引き、翌年五月に今度は三河へ出兵したが長篠で大敗した。

#### 四、明智光秀の丹波攻略と赤井氏

ようやく丹波攻略に動けるようになった織田信長は天正三年六月、丹波の国人らに対して、明智光秀を派遣するので協力するよう呼びかけた。桑田郡の土豪である川勝継氏宛の六月七日付「織田信長朱印状写」がある。その中で信長は川勝氏に、信長に敵対したまま出仕しない内藤・宇津両氏を討つ際の協力を求めている。この両氏は京都錯乱の時に敵対したとあるから、永禄十二年正月に足利義昭を襲撃した三好三人衆の軍に加わっていたのであろう。またそれとはほぼ同様の内容の「信長朱印状」（同月十七日付）が船井郡の土豪小畠氏に送られており、その写が『小畠文書』に残っている。その中で信長は船井郡の土豪達の忠節を求め身上を保証するとしているが、もし敵対すれば処断すると通告している。さらに『小畠文書』には同月十九日付「明智光秀奉書」があり、光秀は小畠氏に対して信長が知行安堵の朱印状はむろん忠節次第で新知を与えると伝えている。これら丹波国人への一連の書状から、信長の丹波進攻計画はまず内藤・宇津氏らを討つて口丹波を制し、そののち奥丹波の赤井を攻める段取りだったと考えられる。

ところが同年十月になると、信長はそれを変更し、直正討

伐のために光秀を派遣した。それは『新免文書』にある十月一日付「織田信長朱印状」からわかる。また同月八日、九日付の長岡（細川）藤孝宛「織田信長黒印状」には、光秀から信長への報告があつて、光秀がすでに丹波に入つていたことがわかる。これら十月の書状はいずれも年季がないが、但馬国養父郡の八木城主・八木豊信が出した天正三年十一月二十四日付の吉川元春宛書状から、この年のものと判断できる。八木豊信は吉川元春に対し、光秀が丹波に進入したので直正は竹田城を引き上げ居城の黒井城に立て籠もつたこと、光秀が黒井城の周囲に二、三ヶ所の砦を築いて包囲したこと、黒井城は兵糧が来春までもたず落城するであろうとの観測を耳にしたことなどを伝えているからだ。また丹波国人の大半は光秀に味方して、黒井城の落城は必至であると思われていたようである。ところが黒井城は落城せず、天正四年正月を迎えた。『兼見卿記』（正月十五日条）によると、それまで光秀に従つていた波多野秀治が裏切り、光秀が敗れたからである。後世「赤井の呼び込み軍法」と呼ばれている秀治の謀反であるが、直正との間に事前の密約があつたのであろうか。しかし密約があつたにしては、波多野秀治が何ヶ月も行動を起こしていないのはおかしい。秀治は、直正の予想外の健闘に謀反の決断をしたとも思えるが、直正の背後に毛利氏があつたことが、その決断の要因だと考えられる。

秀治謀反以前に直正が毛利氏と通じていたことは、天正四年のものと思われる正月二十八日付「荻野直正書状」からわかる。それによると前年に直正が市川経兼に吉川元春への取成を依頼し、元春から返事が来ていた。返事の内容はわからないが、直正が元春の東上が火急を要する旨催促していることから、直正は元春から東上の約束を得ていたものと思う。直正は明智光秀の再度の攻撃に備え、毛利氏の援軍を期待していたに違いなく、また文面から安国寺恵瓊とも連絡をとつていたこともわかる。直正の弟赤井荆部少輔幸家（悪七郎）も吉川元春へ書状を送っている。直正のそれより二日前、正月二十六日付の「赤井幸家書状」は、直正同様に元春の出陣を促している。そしてその際には、どんな命令にも一命を顧みず忠節を尽くす覚悟を述べている。またこれも天正四年のものと思われる五月十九日付吉川元春宛「石河繁書状」から光秀敗北後の丹波の様子がわかる。石川弥七郎繁は丹波国何鹿郡栗村荘の館城主だが、繁は毛利氏が足利義昭を奉じて出陣することを伝え聞き、荻野直正や赤井幸家と相談して忠節を尽くす気持ち述べており、丹波の国人はその考えで一致していると言っている。また繁は直正を通じて吉川元春に取り入つて、直正が元春の東上を促している。また繁は直正を通じて吉川元春に取成を依頼し、元春から返事が来ていたと考えられる。織田信長が上洛したころには織田方であつた多くの国人衆も、赤

井氏に続き波多野氏が離反したことによって、反織田に傾いて行つたのであろう。一方、敗れた明智光秀は京都から居城の坂本城へ帰つたことが、『兼見脚記』天正四年一月二十一日の記事からわかる。敗れた光秀にも離反する国人達が多かつたことと思う。同年正月二十九日付の川勝繼氏宛「織田信長朱印状写」をみると、信長は離反しなかつた川勝氏の態度を褒め、近く再度丹波へ軍を送ることを伝えている。事実、同年二月十八日に光秀は丹波に出陣している。しかしその後光秀は本願寺攻めを命じられ丹波を離れた。このころ信長の本願寺攻撃は激しさを増していた。『赤井文書』に天正四年九月二十六日付と思われる本願寺の坊官下間頼廉の直正宛書状が残っている。これは、直正へ返書として送られたものだが、その文面には、信長の本願寺攻撃をめぐる諸情勢を伝え、また吉川元春東上を報じているが、元春の山陰道東上は実現しなかつた。

翌天正五年十月になると、明智光秀は再び丹波へ入り二十九日には多紀郡の初井城を攻撃し、続いて桑田郡龜山城の内藤氏を降したと『細川家記』にあり、また何人かの国人が光秀に服属したともある。そのような中、荻野直正が死去した。諸系図によるとその忌日は天正六年三月九日、享年五十であつたと言う。死因は腫物であつたらしい。嫡子の鬼十郎（赤井悪右衛門直義）が跡を継いだが、幼少のため叔父の幸

家が後見人となつた。同年三月四日付と思われる細川藤孝宛「織田信長黒印状」によると、信長は自ら丹波に出陣することを表明し、大軍が氷上・多紀両郡への道を通れるよう二十日までに整備することを厳命している。ところが直正の死去がわかつたゆえか信長自身の丹波出陣はなく、代わつて光秀が丹波に入つて波多野秀治の居城である八上城を攻めている。その後光秀は滝川一益らと、荒木氏綱の拠る船井郡の園部城を陥落させ、九月には津田信澄や細川藤孝と長沢義遠を小山城に攻め、高山・馬堀城等を攻略した。十二月になると光秀は播磨から丹波へ入り、八上城へ本格的に攻撃を開始した。翌天正七年五月には氷上城を落した。城主の波多野宗長・宗貞父子は自刃したと言う（『天寧寺文書』）。ここは黒井城と稲継城等の支城とを結ぶ重要な拠点であつたため、黒井城の赤井氏は孤立することになった。『細川家記』によると稲継城と高見城も細川藤孝に攻略されたとあり、六月一日には、とうとう八上城は落城し波多野秀治とその兄弟は安土に送られ処刑された。『信長公記』によると、光秀は七月に宇津城の宇津氏を、そして八月に黒井城を攻め反信長勢力の旗頭赤井氏を下した。赤井氏はほとんど戦うことなく黒井城を明渡している。『富永文書』にある光秀の折紙によると、光秀は氷上郡内の者に還住を命じており、氷上郡を掌握したことがわかる。同年九月に赤井氏の残党が国領城に拠つて抵抗

したが、細川藤孝の軍勢に一掃された。明智光秀は赤井氏を下し丹波一国を平定し終えた。

## おわりに

かくて赤井氏を始めとする丹波の国人は織田信長の一部将である明智光秀の前に敗れさった。丹波の国人は戦国大名化が遅れ、赤井氏も直正の登場が遅く、領土の確保と国人の被官化が十分ではなかった。直正の国人に対する指導力も国人連合の長という域を出なかった。丹波勢が一番当てにしていた毛利氏が援軍を送るのを断念した時点で、勝敗は決したといえるだろう。丹波勢にとってあとは戦いをどう終わらせるかであった。その点で赤井氏と波多野氏は対照的である。八上城とは逆に黒井城の方は、ほとんど戦闘もなままに降伏し、赤井一族に処分による死者は一人もない。信長の、この寛大ともいえる処置はなぜであろうか。それには関白近衛前久が関わっているように思う。前久はかつて京都を出奔して黒井城に居住していた時期があり、そのことがあってか直正は後妻に前久の妹を迎えていた。天正七年のものと思われる三月二十二日付八木豊信宛羽柴秀吉の書状によると、戦争になった際には丹波にいる近衛家の姫を因幡へ移すことを信長が秀吉に命じていたことがわかる。信長は近衛家の姫の帰洛

を条件に赤井一族の助命を許したのではなからうか。その後赤井氏は他家に仕官し存続したが、丹波の在地領主としては黒井城主の赤井氏が最後であった。江戸時代に入ると丹波の国人は他国から入部した大名の支配を受ける。しかし赤井氏を強大にし戦国に名を馳せた荻野直正は地元の英雄として、「丹波の赤鬼」の異名を持ち丹波地域では長く記憶されている。

## 注

- (1) 今谷明氏「室町・戦国期の丹波守護と土豪」〔守護領国支配機構の研究〕
- (2) 芦田岩男氏「丹波波多野氏の勢力拡大過程」〔兵庫の歴史〕二六号
- (3) 細見末雄氏「波多野氏の系譜と興亡」〔丹波史を探る〕森田恭二氏「戦国期歴史細川氏の研究」
- (4) 青木俊夫氏「丹波黒井城」〔兵庫県の歴史〕一五号
- (5) 船越昌氏「丹波黒井城と赤井党」〔歴史手帖〕八巻八号
- (6) 細見末雄氏「赤井氏の盛衰」〔丹波史を探る〕
- (7) 細見末雄氏「寛政重修諸家譜」〔群書系図部集〕
- (8) 福島克彦氏「織豊期における城郭・城下町の地域的展開―丹波国を中心に―」〔ヒストリア〕一四二号
- (9) 橋本政宣氏「関白近衛前久の京都出奔」〔東京大学史料編纂所研究紀要〕四号

(本稿は一九九九年卒業論文を骨子として加筆訂正したものである)